

# 大盛堂書店 2F通信

Vol.1.61

今号では今まで紙面の都合上 掲載  
できなかった 景文館書店・荻野さんの  
コラム(荻野さんごめんなさい)と  
精文館書店・久田かおりさんのお言葉を  
掲載。どうもご一読を。

150-0042

東京都渋谷区宇田川町22-1

山本

一を書いた経験のある著者自身が「既存の出版社から本出すことなくね? じぶんで出版社やれば」と思って始めた、そういう経緯の出版社という点。あ、直接聞いたことがあるわけじゃないから、単にぼくの推測ですよ、そういう経緯の成り立ちじゃないかっていう。

文響社さんの出版物自体はぼくの関心領域とはちょっとちがうんですが、著者自身が発行までじぶんでやる、と決めたら、既存の出版社に頼ることが減るわけですね。流通と、販売することは既存の企業(取次と書店)と一緒にやってるんでしょうけど。

何年も前から、村上龍さんが、電子書籍の製作会社を自分たちで作って運営してる。経営状況については知らないけど、書いた人自身が、そういうやり方を含めて自分で作って売ろうとする、書店や出版社はすっぱして、それをやれる著者にとってはまっとうな話だなと思ってます。書店自身が本を企画・発行する事例も昔からありますしね。

弊社的に大きなニュースなんです。

吉田知子書下ろし原作のドラマが5月から始まっています。大阪の朝日放送で土曜の深夜、「times」という枠。2分のショートドラマをワンカットで撮影する作品が4週間にわたって放送されます。主演は1話と2話がコムアイ(水曜日のカンパネラ)。3話と4話が三戸なつめ。

朝日放送のウェブサイトを見てもらうのがいいんですけど、キャスティングとかいろいろなところにひっかかりがあるというか、見てみようと思うフックがいくつもあると言えるんじゃないですかね。公平に言って映像作品は、監督とか脚本とか出演者のほうが重要なものだと思うのですが、もちろん弊社としても注目して見えています。…弊社弊社たって全部僕が思ってるってだけですけどね…。

僕はもともと放送局の美術の仕事をしていて、美術が番組の雰囲気はどう作るかということについては、いまもそれなりに好きだし、そういうことも考えながら視聴するつもりです。文章に事細かに描かれない音とか、登場人物の衣装とか、町の様子をどう設定するのか。そういう、映像の雰囲気を作る部分を何で演出するのか、楽しみです。音も大切です。

『インプリント〜ぼっけえ、きょうてえ〜』って映画があります。岩井志麻子原作・三池崇史監督。恐怖映画ですけど、これ観たときに「吉田知子『脳天壊了』を映像にするならこういう作り方がいいんだろうなあ」って思いました。こういう作り方っていうのは、「ストーリーも大事だけど、全体的な画に恐怖のムードを出せるか」ってことです。実際にこの映画がどういう思想の元で撮影されたかはわかりませんが。

## 猿のでどころ

第33回 景文館書店・荻野

春。いろいろ食べ物のこと考えちゃいます。

たけのことわかめの若筍煮。これは日本各地で食べるでしょう。筍はうちのあたりでも掘りに行けばいくらでも掘れる。あさりの酒蒸し。潮干狩りなんて何年も行ってないけど、いいですよー。

春とまったく関係ないけど、清原容疑者と焼肉弁当の話、本当に清原自身の指示で差し入れされたのだとしたら…主に人に金品やものをおごる、というやり方でしか周りに人が集まってこなかった人なんだろうな、というのが感想…知らんけど。いや、タダ飯に群がってきた人の方が性悪なんですよけどね…。綿矢りさ「You can keep it.」、大学に入った男の子が同級生にものを気前よくあげたり、インド通のふりをしていたら嘘がバレて、学校に居場所がなくなるみたいな小説。せつなし。

閑話休題。

文響社さんっていう版元がある(ご存知ですか)。で、それとは別に、新しく、小さな出版社にフォーカスした言説とか本がある。

仮にじぶんがどっかの出版社とかメディアにいて、そういうテーマの本を企画するとしたら、文響社を取材しないのは片手落ちじゃないかな、と思う。

なんでかっていうと、その成り立ちのパターンですかね…。パターンっていうのはつまり、過去に自己啓発系のベストセラ

このショートドラマの企画を教えて頂いたとき、誰が監督するんだろうと思ったんですが、ミュージシャンのPVなんかをおおく撮影されてる方だそうです。水曜日のカンパネラ、星野源、OKAMOTO'S、SEKAI NO OWARIとか。

5月放送分の原作が吉田知子、6月放送分が石田衣良。ということで、ここが興味の入り口になる人もいるかもしれませんが、朝日放送のウェブサイトでも視聴できるのでみてください。(第34回)

.....  
足立巻一という人がいる。というか、いた。

小学校の教員かなんかで、全国的な児童詩集の編集人だと思っていたら、ちがった。小説家でした。誤解していたことを何年前に知った。『やちまた』という作品が中央公論新社から出ている。

この人のことは、『牛乳びんの歌 きりんのこども詩人たち』(足立巻一著、理論社)という本で知った。児童詩を紹介する本で、20年位前に図書館で読んだ。うろ覚えで申し訳ないですが、この本で紹介されていた詩の一部に「名前を忘れたら、あそぼ、でいいじゃない」というのがあった。前後があった気もするが、覚えていない。でも、なくてもいいと思う。この本では、そこだけが記憶に残った。

小学2年になるときに、生まれた町から引っ越しをした。幸い、新しい学校には初日からすぐに馴染んだ。でもひとつ、何か月経っても受け入れられないことがあった。その町では、ひとが遊んでいて、あとからきて仲間に入れてもらうときに「かって」と言うのである。生まれた町では「入れて」だった。放課に運動場でボール当てとか、鬼ごっこかしてるところに、男の子も女の子も「かって」「かって」と言ってから遊びに参加する。

小2の新参者の耳には、「かって」は「買ってください」が変化した言葉に思えた。言うのはなんか、屈辱的。なんで、そんな下手に出て頼まなきゃいけないんだ?絶対に言いたくない!! みんなと仲良くなってからもその言葉は一度も使わなかった。

「かって」が「買って」に由来する言葉かどうか? ほんとのところはわからない。仮にそうだったとしても、元の意味はなくなって、「遊びに入れて」という言葉でしかない、その土地では。でも、言えない言葉だった。

いま38歳で、道路から「××君、あ〜そ〜ぼ〜」と叫ぶことはない。そんなことしたら捕まる。でも80歳くらいになって友達の家の前に行って「あそぼ〜」って叫ぶことを想像したら、ちょっと良いかも。それこそ名前忘れてるかもしれないけど。(第35回)

.....  
大盛堂から東急本店のほうに向かう途中に、サーティーワンがありますよね?

ある夏の休日に知人と、あそこのサーティーワンに入った。僕はカップのトリプルを注文。ほんとはカップじゃなくてコーンに、レギュラースクープを3つ乗せたいけど、夏にそうすると食べるより早く溶けるのでカップで。なにかの味を3つ選んだ。何を食べたかなんてももちろん覚えてないけど、たぶん、いつも通りベリー系のあとなんか2つ。カフェモカとか。

一緒にいった知人のオーダーを聞いて驚愕した。

「ポッピングシャワー、ポッピングシャワー、ポッピングシャワー」

いうまでもないけど、トリプルつつたら3つの味を注文できるわけで。もちろん僕も別々の味。っていうかそれしかないでしょ?(というのがその時までの僕の狭い常識)。それなのにポッピングシャワーを3つ食べようとしている連れ。驚きましたよ、そんな発想なかったから。3つの味を楽しもうとしていたじぶんがなんだか卑しい性質のように思えてきちゃって…。

この場面で3種類のフレーバーを注文しない人って、まあ少数派ですよ? (もしかして違うのかな…)。だいたいポッピングシャワーってなに? 注文しようと思ったことないんだけど… (ポッピングシャワーは、アイスの中にカラフルな弾けるキャンディーみたいなのが入っているフレーバーで「アメリカっぽい〜」って感じの見た目のやつです)。

「えっ!同じの3つ?」って聞くと「うん、ポッピングシャワー好きだから」。すげえ!でも、本人が言ってる〈好き〉とは別の、本人にも無意識の別の理由もあるんじゃないかな…。

店を出た知人と僕は歩きながらアイスを食べ、東急本店の屋上でアイスを食べ終わった。屋上にはペットショップがあって、金魚だか熱帯魚だかの水槽がいくつもあった。離れたベンチに座ってる人たちも、なにかを飲んでた。たしかうす曇りで、季節のわりに涼しめな日だったような記憶。ポッピングシャワーはおいしかったと思うんだけど、そのとき以来、じぶんでは食べてない。じぶんと行動の違う人はおもしろい。(第36回)

\*\*\*\*\*

○「私と名古屋」精文館書店中島新町店 久田かおり  
私にとって名古屋とは 人生の半分以上を過ごしてるのに未だ謎の街。 第二の故郷なのに何度でも初めての場所に出会う。 心の迷宮。

\*\*\*\*\*

ということで、次号は怒涛の久田かおりさん特集です。お楽しみに。